

会員数約八百人で鈴木商店解散四十周年目の昭和四十三年には神戸市灘区篠原北町の祥龍寺境内に「供養塔」を建てた。

辰巳会では毎年春の総会のほか正月の新年会と秋の例会を開いている。この私の履歴書の連載が始まる直前の十月十二日に、関西地区の例会が宝塚であったが、百人以上も参加した。高齢者ぞろいだが、懐旧談に花を咲かせるだけではない。中国との国交回復後の世界情勢、日本の貿易のあり方など時事問題や将来への展望まで話題は豊富である。常に未来へ目を向ける姿勢——これが鈴木の大番頭だった故金子直吉さんに代表される「鈴木精神」といえるだろう。

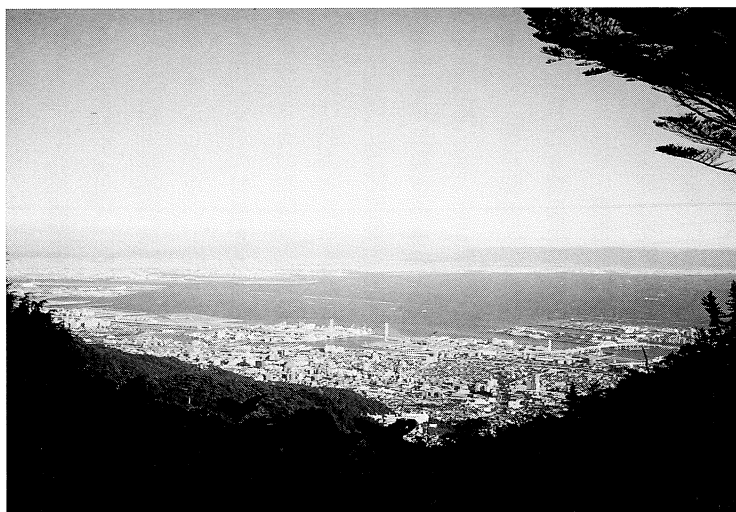
話が前に戻るが、FAPING結成の翌年の昭和三十一年から一年四ヶ月ほどの間、私は日本火災海上保険の社長を務めたことがある。いわゆるテーブルファイヤー（机上火災）事件の責任をとって同社の首脳陣が退陣したため、文字通りの「火消し役」社長として私が引っぱり出されたわけである。保険会社が架空の保険契約をつくり、火災に遭ったことにして、財源をねん出し、代理店へ割り増し手数料を支払っていたのが、テーブルファイヤーの実態である。たまたま大蔵省の特別検査で同社がやり玉に上がったが、同社に限った問題ではなかったのかも知れない。法律上は問題ではなかったのだが、道義上の責任を問われたわけだ。

もともと私は、ビジネスの上では日本火災海上とは関係はなかったが、同社の前身である日本火災の会長や社長を勤めたことのある川崎肇さんとはゴルフを通じて昵懇の間柄だった。この川崎さんに「名前を貸してくれるだけでいいから」と頼まれて、昭和九年に日本火災の監査役になった。その後昭和十四年からは、ごく短い期間を例外にすれば、ずっと同社の非常勤取締役として名を連ねていた。そんな関係

でリリース役の社長に引っぱり出されたのだが、会社へはほとんど顔を出さなかった。その後も昭和四十六年六月まで非常勤取締役としてとどまり、現在は監査役になっている。川崎さんからはゴルフで随分、チョコレートをちょうだいしたから、そのお返しをさせてもらっていることになるのだろうか。

日本経済新聞社刊「私の履歴書」第四十八集より抜粋

昭和四十八年六月二十日発行



辰巳会大会記念 於京都(何有荘) 37. 4. 2.

辰巳会に思う

楠瀬 正明

辰巳会発足四十周年を迎えお目出とうございます。辰巳会発足の昭和三十五年当時を思い起こせば私事乍ら二月に父正一が亡くなり、続けて四月に経理担当の鬼塚様が突然逝去され、鈴木薄荷の経理関係者が不在となりました。そして簿記の講習会に通った事があるというだけの小生が経理を引き受ける事となり、六月決算八月税務申告を控えてのこと如何すればと困惑しました。しかし、今でも鮮明に記憶しておりますが太陽鉱工の山本幸男様には当時魚崎のお宅へ伺い色々とお話をいただき又日本樟腦の藤山様、寺西様外皆様方に大変お世話になり何とか申告書を提出することが出来ました。これも一重に鈴木商店関係者の連体意識、思い遣り、優しさの賜物と有難く思っております。その方々も今や鬼籍に入られてしまいました。

その様な事を思い出し出し出し乍ら四十年とは長い月日ですが過ぎれば短く感じられるものです。と言いますのも父正一始め中村勇吉様、小松彰男様の歴代社長も、そして小生も鈴木商店の薄荷事業に従事することが出来て四人とも五十年以上の間薄荷の香りを嗅ぎ続けて参ったからです。

小生の薄荷事業従事期間より十年以上も短いまだ四十周年の辰巳会ですが残念なことに会員が少なくなりつつあります。会員の構成等を猶一層考慮するかして鈴木商店の精神を汲む辰巳会を五十年・百年と続けることが出来ないものかと思いを巡らしつつ筆を置きます。

辰巳会よ永遠なれ!!